

遠野あたりでは、おまくといいことが起きる。



土淵村の寺が火事で焼け落ちた。
建て直すために大勢の大工が集められた。
山口村の慶次郎が棟梁になって、
寺の建築がはじまった。



ある日の昼休み。

五十人近い大工が休憩をとっていると、
十六、七の美しい娘がす、っと入ってきた。



大工たちはぎよつとして、娘に注目した。
しかし、そんな大勢が見ているというのに。

娘はどこに行ったのか
わからなくなってしまった。
いや、ほんとうに入ってきたのかも
よくわからなくなってしまった。

慶次郎は言った。

「あれは俺の隣の家の娘だ。
長く病気で苦しんでいるから、
こんなところにくるはずがない。
ならばとうとう」

死ぬか。

